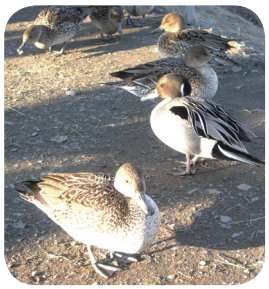
渡り鳥から学ぶ　自然保護

２月 16 日（土）、第７回 MELON 環境市民講座「冬の渡り鳥観察会」を開催しました。大変人気の企画で募集定員を超える応募があり、抽選の上 22 名の方にご参加いただきました。講師は MELON 理事で日本雁を保護する会会長の呉地正行氏にお願いし、伊豆沼周辺と蕪栗沼（かぶくりぬま）を散策しながら随所で鳥の生態や渡り鳥を取り巻く環境について説明していただきました。

天気は晴れでしたが風が強く、帽子にマフラー、手袋、マスクと皆さん万全の防寒対策で臨みました。前半は伊豆沼周辺の遊歩道をゆっくり歩きながら鳥たちを観察しました。頭上を飛ぶ白鳥の姿、沼を飛び立つサギ、頭部に特徴的な飾り羽のあるタゲリなど、さまざまな鳥を観察することができました。

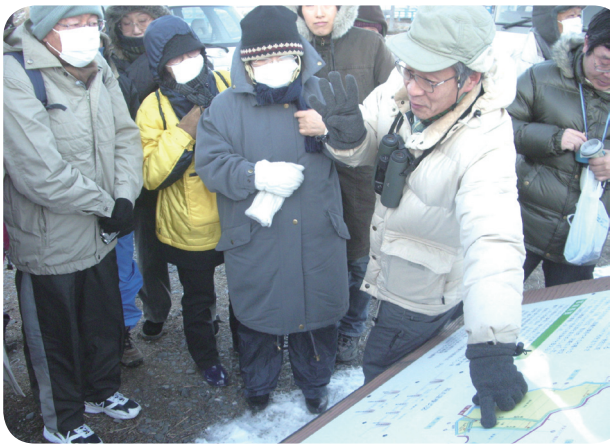
散策路のゴールは東北本線新田駅そばにある、伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター淡水魚館です。淡水魚館のすぐ目の前では餌付けされたカモ類や白鳥がたくさん集まり、警戒心もなく寄ってきます。望遠鏡や双眼鏡を覗かなければ姿を確認できない野生の鳥たちを見てきたばかりの参加者には、とても奇異なものとして目に映った様子で「気持ち悪い」と声も上がるほど圧倒されていました。



至近距離で撮影できる餌付けされたカモたち

雁がねぐらに帰ってきました

望遠鏡や双眼鏡を使って野鳥を観察


蕪栗沼の説明をする呉地理事

後半は蕪栗沼に移動して雁のねぐら入りを観察しました。日が沈む頃にねぐらに帰って来る雁の群れを待ちます。風が心配されましたが夕方は無風で、ゆっくりねぐら入りを観察することができました。雁の帰りを待つ間には、一時は絶滅を危惧されたこと、雁をはじめ渡り鳥たちの生息環境を守るために地域で蕪栗沼を保全する活動が取り組まれている話をうかがいました。

鳥を観察しながらのお話は皆さんの心に強く残ったようです。湿地が減ったこと、開発による環境の変化で伊豆沼や蕪栗沼は渡り鳥にとって決して住み良い場所ではないこと、「ふゆみずたんぼ」のわかりやすい説明など、観察会に参加して深く感銘したことが感想として寄せられました。この他アンケートには「先生の丁寧なお話しがとてもよかった」「感激しました」「今回の機会に恵まれて感謝します」など、皆さんの思いが伝わってくるたくさんの感想をいただきました。